弥生から時を超えて

青谷上寺地遺跡

弥生の生活を体験！
石庖丁で稲穂を摘む

現在の稲刈りといえば、コンバインなどの機械で根元から刈り取ります。

弥生時代の人々は、石庖丁を使い稲穂だけを刈り取っていました。そこで、前回紹介した石庖丁を使って稲刈りを体験してみました。石庖丁で鎌のように切ろうと試みましたが、簡単には切ることができません。

では、弥生人はどのように石庖丁を使っていたのでしょう。写真のように、稲の茎を石庖丁と指ではさみ、上方にちぎりとるようにすると、プツンと簡単に摘み取ることができました。古代の人々は、稲刈りではなく、稲穂摘みをしていたのです。

石庖丁に苦労して開けられた二つの穴は、何のためにあるのでしょう。穴に紐を通し、中指を入れると、手の掌に石庖丁がなじみます。そして中指で石庖丁を押し上げると、てこの原理で楽に穂がつみとれました。

刈り取った稲穂は、どのように保管をしていたのでしょう。青谷上寺地遺跡で出土した炭化米は、モミの一粒一粒が同じ方向を向いています。このことから、穂のまま束ねて保管をしていたことが想像されます。

弥生時代の人々は、稲穂をこのように一本一本ていねいに刈り取り、保管していたのでしょう。お米作りの様子からも、食糧を大切にしていた弥生人の姿がうかがえ、感心させられます。

石庖丁で摘み取る

モミが並んでいる炭化米

因幡万葉 夢幻譚

現代から万葉の世界へ旅をする私こと「万葉の旅人」が大伴家持と語り合う夢物語

巻十 新嘗祭で収穫を感謝

天平宝字五年（七六一）の旧暦十一月も末。昔から因幡の人々は、神に収穫を感謝する。その日の正午の陽は低く、ことに昼が短かい冬至を迎えていた。

「今頃、宮中では、帝が新穀や新酒を神に捧げ、農作物の恵みに感謝して、自らも食す新嘗祭ですかね」と私は、家持さんに問いかけてみた。

「東大寺の大仏開眼供養のあった九年前、亡き聖武帝の新嘗祭の後の宴は、賑やかだった。時の大納言巨勢卿や石川年足式部卿、文室智努卿、右大弁藤原八束、大和守藤原永手殿とともに少納言として末席に連なり、歌を詠んだのだ」と家持さんは懐かしそうに言いながら、つい三年前の因幡国守左遷に思い至ったのか、一瞬表情が翳った。

天空から梅の花と見紛うほどの、一片の雪が舞い降りてきた。

「因幡へ赴任して三年半、年明けには、いよいよ任期満ちて都びとですか」と私が問えば、「先のことはわからないが、飛鳥の大和三山によく似た因幡の山並みや川、風土にずいぶん慰められた。それに、有名な稲羽の白兎の神話で大国主命が求婚した八上姫の故地は、実に神さびた土地柄だ」と家持さんは、いつになく饒舌であった。

「やはり、ご当地を誉めるのは、国守の任務ですか」と私がからかえば、微かに笑んだ家持さんが「本心だ」と語りかけているようだった。続く…。

©鈴木靖将

売沼神社（鳥取市河原町）
「延喜式」神名帳の「売沼神社」が現在の売沼神社。祭神は、稲羽の白兎で有名な稲羽八上比売命

万葉クイズ

（先回の問題）妻が贈ってきた形見とは何？
（解答）下着
（今月の問題）
現在の新嘗祭の日は、何の日？
答えは2月1日号です。

お詫びと訂正

10月1日号の万葉クイズの秋の七草は、尾花・撫子・女郎花・藤袴・朝顔の他に萩・葛花でした。

（文＝因幡万葉歴史館主任学芸員　中山和之）